

crossphere 法を用いてサル脊髄の血流動態を観察した。馬尾の支配動脈の結紮による血流変動と、坐骨神経の刺激に対する血流変動を馬尾・円錐部で測定した。結紮群では円錐部にも血流の減少が見られ、また末梢神経の刺激に対する円錐部の血流の増加は軽度であった。従って馬尾の循環障害は円錐部の血行不全をも招来させ、馬尾・円錐部の虚血により間歇性跛行が発現すると推察した。

33. 急性中心性頸髄損傷の臨床的検討

○小林 彰, 大井利夫, 佐久川輝章
北島忠昭, 大西正康 (上都賀)

当院および関連病院における急性中心性頸髄損傷32例につき、神経学的所見に基き頸髄の横位診断を試み、その障害範囲の広がりにより本損傷を上肢型、四肢型Ⅰ、四肢型Ⅱの3型に分類した。これら3型につき種々に検討し、病態生理因子に循環障害が強く関与している事を述べ、上肢型は動脈障害、四肢型は動脈障害に加え静脈障害が大であると推定した。治療は保存療法が原則であり静脈系を破壊する椎弓切除術は好ましくないと考えた。

34. 頻回に骨折をおこした甲状腺機能亢進症の1例

○斉藤正仁, 土屋恵一, 上野正純
(県立佐原)

症例は63歳女性。他院にて右大腿骨々折の術後、機能訓練を目的として入院。X線像で全身の著明な osteoporosis を認め、精査の結果、Hyperthyroidism による osteoporosis と診断した。原疾患の治療と共に、慎重に機能訓練を開始したが、入院中、同側大腿骨に2度に亘る骨折を生じ、吐血等の全身状態悪化のため治療に難渋した。Hyperthyroidism による osteoporosis は骨代謝亢進によるものとされているが、それによる病的骨折は極めて稀れである。

35. 当院における距骨骨折の治療経験について

○高野正一, 重広信三郎, 中村 勉
徳重克彦 (県立東金)

過去12年間に加療した16例の距骨々折の治療成績につき考察した。受傷後6~8週に生ずる talar dome の atrophy の有無は avascular necrosis 発生を知る良いメルクマールとなった。頸部骨折では Watson-Jones 分類の type III に avascular necrosis の発生が多く見られたが、受傷後直ちに整復された症例には生じなかった。距踵関節固定術を行った症例では、revascularization の促

進を見る事も無く、臨床成績はむしろ不良であった。

36. 当院における成人の化膿性関節炎について

○鈴木洋一, 山下武広, 野平勲一
金田庸一 (千葉市立)

昭和49年より55年迄に当院にて11例12関節の化膿性関節炎を経験した。原因は関節穿刺ステロイド注入によるものが7関節と過半数を占めた。関節穿刺ステロイド注入の適応を厳しくすべきことを強調した。慢性関節リウマチは7例あり全例重症例で、その臨床経過が炎症の急性増悪と誤診された症例があった。治療は主に局所持続洗浄法を施行しているが、7例中2例の再発例を経験した。治療については今後とも検討してゆきたい。

37. アキレス腱断裂——経皮的縫合法の治療経験

○鄭 元浩, 土川秀紀, 矢島敏晴
(清水厚生)

新鮮アキレス腱断裂に対し1978年以来経皮的縫合法(経皮法)を一部に採用しているが、今回経皮法10例、神中法10例を調査し比較検討した。経皮法は神中法に比べ手術侵襲が小さく手技も容易であった。再断裂が1例、筋力低下が2例あったが、これらは後療法に問題のあった症例であり、また調査時日常生活に支障はなかった。経皮法は手術適応を選べば優れた治療法であると思われる。

38. 最近の当院におけるアキレス腱断裂の手術法

○蔡 永南, 坂巻 皓, 鍋島和夫
岡崎壮之, 堂後昭彦, 黒田重史
(川鉄)

われわれは昭和50年4月以降、新鮮アキレス腱断裂に対し、横切開と Anchoring suture の組合せにより49例に手術を施行した。男30例、女19例であった。日常生活動作及び運動動作について25例に直接検診、10例に対しアンケート調査を施行した。結果、満足すべき成績を得た。我々の方法では、皮膚の癒着が目立たなく、皮膚と腱の癒着が最小限で靴による愁訴が少ない。また縫合時適度存腱の緊張が得られるため、腱の短縮が起りにくい。

39. 当院に於ける小児骨折について

○西山秀木, 松原 保, 圓井芳晴
大須英夫 (沼津市立)

当院に於ける過去9年間の小児骨折患者総数(15歳以